

阪神淡路大震災の対策担当相になったのは、震災発生（平成7年1月17日）から3日後だった。村山（富市首相当時）さんから「省庁間調整も含め専任でやっていただきたい」と言われた。すぐさま現地に飛び、悲惨な状況を見て「これは命がけでやらなにかん」と思った。

国会対応と日曜のメディア対応を除けば現地で陣頭指揮をとった。「一切をやる」と腹を決めたから、超法規的措置も使った。超法規でもやると首相らに相談したが「お任せします」というのでほぼとやられた。

当初の課題は被災者の生活支援だった。仮設住宅は兵庫県から3万戸の要望が来た。官僚主導なら2割減らそうかとなるだろうが、私は逆に4万戸の建築を命じた。最終的には4万8千戸になった。

しかし、国内の在庫は2千戸しかなく、カナダや米国、韓国などからも手配した。建設も当初ははかどらなかつたので、日本の業者の社長を全員集め、「土日返上で急ピツ

超法規的措置 決断するとき

小里貞利^元地震対策担当相

単刀直言

「手でやってくれ」とお願いして作業にあたってもらった。その次は、復興の障害となるがれきの処分だった。

公費負担は即決

現場を回って個人に負担させるのは大変だと思い、公費でやると即座に決めた。大蔵省（現財務省）から来た官僚が「公費と言わない方がいいですよ」と言うのを「計算するな」と一蹴した。お金を気にして復興が遅れてはいけないという気持ちがあった。森がれきの集積場も要る。森林法や農地法の手続き、許可も一切やらず、六甲山の裏や神戸港に集めることを決めた。



東日本大震災のこれまでを見ると、官（直人首相）さんや枝野（幸男官房長官）君がやっていたらしゃるんだ、という感じがする。2人の真摯な取り組みは評価するが、史上初めてみる震災への対応をこの仕組みで果たせるのか、他の対策はやっていけるのか。どうすればよかったか。当初から官邸での震災対策本部を細分、分担して関係省庁か

おさと・さだとし 昭和5年、鹿児島県生まれ。同県議を経て54年に衆院初当選。労相、総務庁長官、自民党総務会長を歴任。野党時代の党国対委員長

として政権奪還に尽力したこと。整備新幹線建設を推進し「ミスター新幹線」の異名をとった。平成17年に引退。ハーレー・ダビッドソンが愛車。80歳。

ら人材を集めることだったろう。

計画が見えない

県や市町村の現場は動き出しているのに、総合的な対策を取るべき東京からなかなか計画が見えない、誰がやっているのか分らない、というのが被災地の思いではないか。

枝野君が原発対策や震災対策で記者会見しているけれども、彼は本当の責任者なのか。菅さんはたまにあいさつ程度のコメントを出すだけだ。

司令塔としての首相の役割は、官邸の奥の方で肝を据えて座り、「情報を持ってこい。俺が総合的に調整する」というところにある。電力会社へ行ったり、ヘリで飛んだりとゴソゴソして、最高司令官が不在になつてはならぬのだ。（今堀守通）